

聴覚障害者における聾（ろう）と難聴のアイデンティティ —デフ・アイデンティティ形成の過程と要因—

島根 陽平*・井上 清子**

Self-Identity as Deaf or Hard of Hearing by Hearing Impaired Persons — Process and Factors of Deaf Identity —

Youhei SHIMANE, Kiyoko INOUE

I はじめに

聴覚障害者と関わりを持つ中で、自身のアイデンティティを確立するための悩みや葛藤をよく耳にする。それは聴覚障害者が聞こえる世界（健聴の文化）と聞こえない世界（ろう文化）という2つの世界に接触するからであり、その2つの世界を自分自身の中でどのように位置づけるかで悩み、葛藤しているように感じる。

Weinberg and Sterritt (1986)¹⁾ は聴覚障害者の文化的アイデンティティである「デフ・アイデンティティ (Deaf identity)」を、「聴覚障害者における健聴者集団と聴覚障害者集団への所属意識の在り方」と定義しているが、このデフ・アイデンティティを確立する上で重要となるのが、「ろう」と「難聴」の区分だと考えられる。ところが上農 (1996)²⁾ が、「(ろうと難聴) 各集団の差異の意味が、外部からだけでなく、その集団内でさえ十分に理解されていない面があり、議論の混乱を二重のものにしている。」と述べているように、ろうと難聴の区分は非常に曖昧であり、それが聴覚障害者のアイデンティティ確立を困難なものとしている。

世界保健機関 (World Health Organization、以下 WHO と記す) による国際生活機能分類－国際障害分類改訂版 (2002)³⁾ の聴力障害程度の分類では、聴力 90dB 以下の聴覚障害者を難聴、91dB 以上の聴覚障害者を最重度難聴としており、この最重度難聴を「ろう (total hearing loss)」と呼ぶのだが、安藤 (1991)⁴⁾ は、「聴覚障害を大別すると、音声言語獲得期以前に重度の聴力障害を持っている場合や、言語獲得期以降に失聴した場合でも、幼少の時期からろう学校に学び、主要なコミュニケーション手段が手話であるような聴覚障害者を“ろうあ者”、音声言語を獲得した後、おおむね思春期以後、もしくは社会人になってから失聴した場合を“中途失聴者”、補聴器の使用によって音声言語の識別がある程度まで可能であり、音声言語を通常のコミュニケー

* しまね ようへい 東京都立矢口特別支援学校

** いのうえ きよこ 文教大学教育学部

ション手段としている場合を「難聴者」としている。」と言い、更に、「中には難聴者であっても自身をろうあ者と認識し、手話に誇りを持っている聴覚障害者もいるし、逆に、手話に堪能でありながら、ろうと言われることに抵抗を示し、難聴者と行動をともにする人もいる」と述べている。

このようにろうと難聴は失聴の程度 (dB) だけでは区分できず、様々な要因が絡み合っていると考えられる。本研究ではデフ・アイデンティティの形成要因を中心に、聴覚障害者が自身をどのようにして「ろう」または「難聴」であるか決定するのかを明らかにするために、聴覚障害者を対象に質問紙調査を行い、その過程と要因を研究した。

なお、本論文では聴覚に損傷がある人全般を「聴覚障害者」と表記し、必要に応じて「ろう(聾)」、「難聴」、「中途失聴」などの個別の表記を用いることとする。

II 方法

1. 調査対象

東京および埼玉在住の聴覚障害者 41 名 (大学生 6 名、社会人 16 名、自営業 2 人、主婦 7 名、その他 10 名；男性 25 名、女性 16 名)。平均年齢は 41.50 (± 17.31) 歳であった。

2. 調査時期

2008 年 11 月—12 月。

3. 実施方法

聴覚障害者が自身をどのようにして「ろう」または「難聴」であるかを決定するのか研究するため質問紙調査を行った。質問紙は、研究の趣旨などを説明し同意が得られた場合、その場で手渡しし回答してもらい回収したが、回答が終わらなかった場合や、直接配布・回収ができない場合は郵送という形を取った。

質問紙の内容は、①障害等級、②自身のろう・難聴の属性、③聴覚障害を被った時期、④家族に聴覚障害者がいるか、⑤自分がろうであるか難聴であるか悩んだことがあるか、⑥コミュニケーション手段、⑦幼稚園から大学までの教育歴、⑧音声日本語・手話どちらを先に取得したか、の 8 つを問う質問項目を設定した。

次に今の生活の満足度を調べるため、①私は今の生活に満足している、②周囲は私を理解してくれている、③私は自信に満ちている、④私は普通の生活を送れている、の 4 つの質問項目に対し、「まったくそうでない」「あまりそうでない」「どちらともいえない」「だいたいそう」「とてもそう」の 5 件法で回答を求めた。

最後に自身が思うろう者・難聴者の特徴を、文献 (安藤 1991)⁴⁾などを参考にして作成した 19 項目の中から複数回答可で選択してもらい、19 項目以外の特徴があると考えられる場合には、空欄に記述してもらった。

III 結果

1. 対象者の聴覚障害についてのプロフィール

ろうか難聴かの自身の属性を回答する質問では、ろうと回答したものが32名で全体の78.0%と多く、難聴と回答したものは7名と全体の17.1%であった。この他にわからない（悩んでいる）と回答したものが1名、ろうと難聴両方を回答したものが1名であった。なお以後、ろうと難聴両方を回答したものは、自身の属性が「わからない」に入れて集計した。

障害等級は、41名中、1級10名（24.4%）、2級26名（63.4%）、3級3名（7.3%）、4級1名（2.4%）、未回答が1名であった。ろうか難聴かの自身の属性に分けたのが、表1である。

表1 属性と障害等級

	1級	2級	3級	4級
ろう	9名(28.1%)	22名(68.8%)		
難聴	1名(14.3%)	3名(42.9%)	2名(28.6%)	1名(14.3%)
わからない		1名(50.0%)	1名(50.0%)	

ろうでは、1級9名（28.1%）、2級22名（68.8%）、未回答が1名（3.1%）であり、難聴では、1級1名（14.3%）、2級3名（42.9%）、3級2名（28.6%）、4級1名（14.3%）であった。わからないと回答したものは、2級1名（50.0%）、3級1名（50.0%）であった。自身をろうするものと難聴とするものとは、障害等級にカイ二乗検定で有意差がみられ（ $\chi^2(4) = 14.963, p < .05$ ）、ろうの方が障害等級が重い者が多かった。

聴覚障害を披った時期では、生まれつき（先天性）が最も多く21名（51.2%）で、次いで児童期までに聴覚障害を披うものが15名（36.6%）と続いた。不明1名、未回答者は4名であった。今回の調査では児童期以降に障害を披うものは見られなかった。ろうか難聴かの自身の属性に分けたのが、表2である。ろうでは、生まれつき（先天性）が16名（50.0%）、児童期までに聴覚障害を披ったものが11名（34.4%）、不明1名（3.1%）、未回答者は4名（12.5%）であった。難聴では、生まれつき（先天性）が4名（57.1%）、児童期までに聴覚障害を披ったものが3名（42.9%）であった。わからないと回答したものは、生まれつき（先天性）が1名（50.0%）、児童期までに聴覚障害を披ったものが1名（50.0%）であった。ろうと難聴では、聴覚障害を披った時期は、有意差はみられなかった。

表2 属性と障害を披った時期

	先天性	児童期まで
ろう	16名(50.0%)	11名(34.4%)
難聴	4名(57.1%)	3名(42.9%)
わからない	1名(50.0%)	1名(50.0%)

デフ・アイデンティティについて悩んだことがあると答えたものは、全体の51.2%にあたる21名で、うち3名は現在葛藤していると回答した。また、自身の属性（ろう・難聴）が変化した経験を持つものもおり、難聴者からろう者へ変わった経験を持つもの（3名）、何度かろう者・難聴者の間を行き来しているもの（4名）と全体の18.0%で見られた。ろうか難聴かの自身の属性に分けたのが、表3である。ろうでは、悩んだことがあると答えたものは15名（46.9%）で、難聴では悩んだことがあると答えたものは4名（57.1%）であった。わからないと回答したものは、2名とも悩んだことがあった。ろうと難聴では、デフ・アイデンティティについて悩んだことの有無に、有意差はみられなかった。

表3 属性とデフ・アイデンティティ葛藤の有無

	葛藤あり	葛藤なし
ろう	15名(46.9%)	17名(53.1%)
難聴	4名(57.1%)	3名(42.9%)
わからない	2名(100.0%)	

2. 聴力とデフ・アイデンティティ

自身のろう・難聴の属性についての回答と、医学的な分類としてのWHOの聴力障害程度（難聴：聴力91dB未満、ろう：聴力91dB以上）との関係を調べたのが表4である。

その結果、ろうでは、聴力91dB以上（医学的にはろう）の者25名（78.1%）、聴力91dB未満（医学的には難聴）の者3名（9.4%）、未回答4名（12.5%）、難聴では、聴力91dB以上（医学的にはろう）の者4名（57.1%）、聴力91dB未満（医学的には難聴）の者2名（28.6%）、未回答1名（14.3%）であった。自分がろうか難聴かわからないと回答したものは医学的にはろうと医学的には難聴の者が各1名ずつであった。また、聴力91dB以上（医学的にはろう）のもの聴力91dB未満（医学的には難聴）のものの中で、ろうと難聴の自身の属性について有意差はみられなかった。

表4 属性と聴力

	91 dB以上(ろう)	91 dB未満(難聴)
ろう	25名(78.1%)	3名(9.4%)
難聴	4名(57.1%)	2名(28.6%)
わからない	2名(100.0%)	

3. 最初に獲得したコミュニケーション手段とデフ・アイデンティティ

自身のろう・難聴の属性についての回答と、最初に取得したコミュニケーション手段を問う質問との関係を調べたのが表5である。

その結果、ろうでは、先に音声日本語を獲得した者は19名（59.4%）、手話を獲得した者は13名（40.6%）であった。難聴者では、先に音声日本語を獲得した者は6名（85.7%）、手話を獲得した者は1名（14.3%）であった。ろうか難聴かわからないもの2名はすべて音声言語を先に獲

得していた。ろうと難聴では、最初に獲得したコミュニケーション手段に、有意差はみられなかった。

表5 属性と最初に獲得したコミュニケーション手段

	音声日本語	手話
ろう	19名(59.4%)	13名(40.6%)
難聴	6名(85.7%)	1名(14.3%)
わからない	2名(100.0%)	

4. 日常使用するコミュニケーション手段とデフ・アイデンティティ

日常で主に使用するコミュニケーション手段について、属性ごとにまとめると表6のようになった(複数回答)。発信手段について、ろう、難聴、わからない者のいずれも、手話が最も多く、難聴者と属性がわからない者では、100%であった。同様に、受診手段でも、難聴とろうが手話が100%であるのにたいして、ろうでは、手話が100%ではなかった。これは、ろう者は、一般的に手話とは日本手話を指すと考え、日本語対応手話(シムコム)は話すが日本手話は話さないものが回答した可能性が考えられた。自身の属性がわからない者は、2名とも発信受信に筆談を使っていなかった。ろうと難聴では、日常使用するコミュニケーション手段に有意差はみられなかった。

表6 属性と日常でのコミュニケーション手段

	発信			受信			
	手話	発声	筆談	手話	読話	筆談	残存聴力
ろう	93.8%	50.0%	62.5%	90.6%	50.0%	62.5%	6.3%
難聴	100.0%	71.4%	42.9%	100.0%	71.4%	71.4%	28.6%
わからない	100.0%	50.0%	0.0%	100.0%	50.0%	0.0%	100.0%

5. 教育とデフアイデンティティについて

教育歴から回答者を「小学部からの一貫したろう教育」「小学校からの一貫した普通教育」「普通学校及びろう学校での教育両方を経験」の3つのグループに分け、「自身の属性」、「自分がろうであるか難聴であるか悩んだことがあるか」への回答とクロス集計した(表7)。なお、「普通学校及びろう学校での教育両方を経験」は様々であり、高等学校のみインテグレートする例や、高等部からろう学校に戻る例などがあつた。

普通学校及びろう学校での教育を両方経験してきた聴覚障害者の場合、100%のものが自身の属性について悩んだ経験を持っていた。また、ろう教育のみ受けてきた聴覚障害者は、他の2群に比べて悩んだ経験が、カイ二乗検定で有意に少ないことがわかつた($\chi^2(2) = 15.266, p < .001$)。

また、属性ごとに教育歴を比較すると、ろうでは小中高と一貫してろう教育を受けているものが一番多かつた。難聴では、ろう学校と普通学校、両方経験のいずれにも分散していた。自身の

属性がわからないものは2名ともろうと普通学校の両方を経験していた。ろうと難聴とでは、ろうは難聴より一貫してろう教育を受けているものが多く、難聴はろうより一貫して普通教育を受けているものが、カイ二乗検定で有意に多かった ($\chi^2(2) = 6.924, p < .05$)。

表7 教育歴と属性・葛藤の有無

教育歴	人数	属性			葛藤有
		ろう	難聴	わからない	
小学部から一貫したろう教育	27名	24名	3名	0名	8名 (29.6%)
小学校から一貫した普通教育	3名	1名	2名	0名	2名 (66.7%)
普通学校及びろう学校での教育両方を経験	11名	7名	2名	2名	11名 (100.0%)

6. デファアイデンティティと生活満足度について

生活満足尺度については、表8にろう・難聴別に結果をまとめた。

ろうと難聴で比較すると、全体的にろうより難聴の方が満足度が低く現れた。表9に示す通り、T検定の結果「私は自信に満ちている」では有意にろうの方が得点が高く ($t = 2.234, p < .05$)、「私は普通の生活を送れている」ではろうの方が高い傾向がある ($t = 1.878, p < .1$) ことがわかった。

表8 ろうと難聴の生活満足尺度の比較

	属性	N	平均値	SD	t値
1.私は今の生活に満足している	ろう	30	3.84	.884	1.606
	難聴	7	3.29	.488	
2.周囲は私を理解してくれている	ろう	30	3.56	.716	.918
	難聴	7	3.29	.756	
3.私は自信に満ちている	ろう	30	3.68	1.013	2.234*
	難聴	7	2.71	1.113	
4.私は普通の生活を送れている	ろう	30	3.88	.751	1.878(*)
	難聴	7	3.29	.756	

(*) $p < .1$ * $p < .05$

7. ろう・難聴の区分についての意識

ろう・難聴の区分についての19項目への回答は以下の通りとなった(表9)。まず、ろうの特徴であるが、得点の高いものを挙げると、「日本手話を使う聴覚障害者(70.7%)」、「ろう学校に

通っていた聴覚障害者（63.4%）」、「手話を使いながら発話をしない聴覚障害者（51.2%）」、「聴力が91dB以上の聴覚障害者（51.2%）」、「ろう社会（デフ・コミュニティー）に所属している聴覚障害者（51.2%）」、「補聴器をつけない聴覚障害者（48.8%）」の順に高得点となっていた。

次いで難聴の特徴では、「聴覚口話法を使う聴覚障害者（41.5%）」、「難聴学級に通っていた聴覚障害者（41.5%）」、「手話を使わない聴覚障害者（39.0%）」、「日本語対応手話（シムコム）を使う聴覚障害者（39.0%）」、「聴力が90dB以下の聴覚障害者（39.0%）」、「普通学校に通っていた聴覚障害者（36.6%）」の順に高得点となっていた。

なお、表に登場するデフ・ファミリーとは、家族全員が聴覚障害者（主にろう者）の家族のことである。

表9 ろう・難聴の区分についての意識

	ろう者	難聴者
聴力が90dB以下の聴覚障害者	12.2%	39.0%
聴力が91dB以上の聴覚障害者	51.2%	9.8%
ろう社会(デフ・コミュニティー)に所属している聴覚障害者	51.2%	4.9%
健聴の社会に所属している聴覚障害者	12.2%	34.1%
手話を使わない聴覚障害者	7.3%	39.0%
日本語対応手話(シムコム)を使う聴覚障害者	7.3%	39.0%
日本手話を使う聴覚障害者	70.7%	9.8%
聴覚口話法を使う聴覚障害者	14.6%	41.5%
手話を使いながら発話をしない聴覚障害者	51.2%	2.4%
手話をしながら発話をする聴覚障害者	26.8%	34.1%
筆談を用いる聴覚障害者	34.1%	17.1%
ろう学校に通っていた聴覚障害者	63.4%	7.3%
普通学校に通っていた聴覚障害者	12.2%	36.6%
難聴学級に通っていた聴覚障害者	4.9%	41.5%
人口内耳をつけた聴覚障害者	4.9%	34.1%
補聴器をつけない聴覚障害者	48.8%	4.9%
デフファミリーに生まれた聴覚障害者	39.0%	7.3%
視覚情報を第一に生活する聴覚障害者	34.1%	9.8%
聴覚情報を活用している聴覚障害者	22.0%	29.3%

IV 考察

自身がろうであるか難聴であるか悩んだ経験を問う質問で「自身がろう者なのか難聴者なのか悩んだことがある」、もしくは「現在悩んでいる」と回答したのが全体の51.2%であったように、多くの聴覚障害者が自身のデフ・アイデンティティ確立のために葛藤をすることがわかった。特にろう学校での教育及び普通学校へのインテグレーションの両方を経験したものはデフ・アイデンティティの葛藤経験が多く、今回の調査では11名中11名が葛藤を経験（もしくは現在葛藤中）であった。これはろうの文化と健聴の文化の両方に接する機会があるからであり、鳥越（1999）の言う2つの文化の間での葛藤、統合が見られる。逆に一貫してろう学校でのろう教育を経験したものは葛藤を経験する割合は低く、27名中8名と29.6%ほどであり、27名中24名がろうのアイデンティティを持っていた。自分の属性（ろう・難聴）が変化した経験があるかを問う質問では、ずっと変化していない32名の他、難聴者からろう者へ変わった経験を持つもの（3名）、何度かろう者・難聴者の間を行き来しているもの（4名）と、その属性が変化することがあることもわかった。

デフ・アイデンティティを確立する際、決定のための要因が必要であると考えられるが、ろうと難聴の特徴について質問したところ、ろうの特徴として「日本手話を使う聴覚障害者（文化・社会的）」、「ろう学校に通っていた聴覚障害者（教育的）」、「手話を使いながら発話をしない聴覚障害者（文化・社会的）」、「聴力が91dB以上の聴覚障害者（医学的）」、「ろう社会（デフ・コミュニティ）に所属している聴覚障害者（文化的・社会的）」、「補聴器をつけない聴覚障害者（文化・社会的）」などの得点が高かった。また、難聴の特徴としては、「日本語対応手話（シムコム）を使う聴覚障害者（文化・社会的）」、「聴覚口話法を使う聴覚障害者（文化・社会的）」、「難聴学級に通っていた聴覚障害者（教育的）」、「聴力が90dB以下の聴覚障害者（医学的）」、「手話を使いながら発話をする聴覚障害者（文化・社会的）」、「普通学校に通っていた聴覚障害者（教育的）」などの得点が高かった。

ろう・難聴の決定は最終的には本人の意志であると考えられるが、このような文化的・社会的な要因や医学的要因、教育歴など様々な要因が考えられる。しかし、聴力（dB）とろう・難聴の属性に有意差がみられなかったように、デフ・アイデンティティの確立には、医学的な要因よりも、聴覚障害者がおかれた文化・社会・教育などが大きく影響すると考えられる。

V まとめ

デフ・アイデンティティの形成要因を中心に、聴覚障害者が自身をどのようにして「ろう」または「難聴」であるか決定するのかを明らかにするために、その過程と要因を研究した。

その結果、自身がろう者なのか難聴者なのかというデフ・アイデンティティの葛藤を経験したことのある聴覚障害者は全体の51.3%であり、特にろう学校での教育及び普通学校へのインテグレーションの両方を経験したものは葛藤経験が多かった。自分の属性（ろう・難聴）が変化した経験を持つものも全体の18.0%で見られた。

「ろう」と「難聴」の区分であるが、聴力（dB）によって区分するWHOの定義と、聴覚障害者が持つデフ・アイデンティティでは差があることがわかる。今回の調査から医学的な要因以上に文化的・社会的、教育的要因が自身の属性決定に影響を与えることが推測された。

引用文献

- 1) Weinberg, N and Sterritt, M : Disability and Identity: A study of Identity Patterns in Adolescents with Hearing Impairments、1986
- 2) 上農正剛 : 「ろう・中途失聴・難聴—その差異と基本的問題」『現代思想』24 (5)、52～57、1996
- 3) World Health Organization : International Classification of Functioning, Disability and Health, ICF、障害者福祉研究会編『ICF 国際生活機能分類—国際障害分類改定版』2002
- 4) 安藤豊喜 「聴覚障害と聴覚障害者」、新しい聴覚障害者像を求めて編集委員会編『新しい聴覚障害者像を求めて』(財)全日本聾唖連盟出版局、1991